

久留米

通高 信専

第69号

[MARCH 16, 2012]

久留米工業高等専門学校企画主事室
〒830-8555 久留米市小森野1-1-1
TEL:0942-35-9300
<http://www.kurume-nct.ac.jp/>



久留米工業高等専門学校
校長 上田 孝

卒業生に贈る言葉 「Never give up !」

本科卒業生・専攻科修了生の皆さん、おめでとうございます。これまでの皆さんの頑張りにより心から拍手を送ります。皆さんもこの機会に、保護者やご家族を始め、皆さんの高専生活を支えて下さった方々への感謝の気持ちを、きちんと言葉にして伝えて下さい。

AKB48の楽曲GIVE ME FIVE! に「そう 卒業とは出口じゃなくて入口だろ」とあるように、米国の大学の卒業式(commencement)という単語には、「始まり」「開始」という意味もあります。卒業・修了は、まさに皆さんの人生の新たな始まりです。いよいよ4月からは社会人として或いは更なる学問研究に向けて、新たな出発をします。その前に、ここで一度立ち止まって、久留米高専での5年間或いは7年間を振り返り、自分自身にとって高専生活がどのような意味があったのか、高専で何を得られたのかをじっくりと考えてみて下さい。知識? 技術? 部活? 友人? 高専祭? 体育祭? …高専で得られたものは各自異なると思いますが、それが今後の人生を歩んで行かれる際に自分を支えるバックボーンとなることでしょう。

顧みれば、皆さんがこの世に生を受けた頃の我が国の経済は、それまで約4年間続いたITバブルと呼ばれた好景気の中で、日本の保険会社が57億円でゴッホの絵画「ひまわり」を購入したり、「ワンレン・ボディコン」の若い女性たちがディスコで踊り飽かしたりといった華やかに浮かれていた社会から、金融破綻によりバブル崩壊に転じ、約15年間続いてきた安定成長期が終焉を迎え、社会の火が消え始めた頃でした。その後「失われた10年」と呼ばれる長期不況が続き、平成20年9月のリーマン・ショック、さらに今日の欧州金融危機が国際経済に大きな影を落としています。

皆さんの高専での最後の年は、九州では新幹線の博多・鹿児島間が開通し、九州経済の更なる発展に期待が寄せられる一

方、日本全国では3月11日に発生した東日本大震災による未曾有の災害からの復興一色の年でした。TVでも新聞でも被災地の様子が連日報道され、被災地の方々はもとより、日本全体で東北復興に向けてNever give up! の合言葉の下、力を合わせた取組が各所で進められました。

このような苦しい時こそ、シェイクスピアの戯曲『マクベス』の中の「この世に明けぬ夜は無し(The night is long that never finds the day.)」の台詞の通り、明るい未来を信じて、諦めずに努力を続けていくことが大切です。

フランスのパスツールとともに「近代細菌学の開祖」と言われているドイツの細菌学者ロベルト・コッホ(1843-1910)が好んだ言葉も「決して降参するな。」でした。彼は炭疽菌、結核菌、コレラ菌を発見し、1905年には結核に関する研究でノーベル生理学・医学賞を受賞しています。結核菌は染色しにくく増殖が著しく遅いため、発見には多くの苦勞を伴いましたが、粘り強い研究と結核が感染症であるという信念で、実験に成功しました。

今回の東日本大震災による福島原発の事故のように、科学技術の進展が時には人類に大きな災いをもたらすことは残念ながら事実ですが、社会の復興・発展、生活の利便性の向上を図る上で、科学技術の進展が不可欠であることも事実であり、エンジニアは胸を張って、誠実に人々に役立つ科学技術の開発を続けていくことが肝要です。

皆さんは「超」就職氷河期と呼ばれる荒海に船出をするわけですが、今後の人生で、山あり谷ありと、幾多の喜びと困難に出会うことでしょう。苦しい時こそ自分の真価が問われる時です。Never give up! の精神で、一度しかない人生を謳歌されることを願ってやみません。

卒業生の言葉

思い出

機械工学科 5年 原野 和哉

「卒業」この儀式を受けるのは(幼稚園を除けば)これで3度目になる。残念ながら今回の卒業式では泣きながらクラスの別れを惜しむ女子はいないであろうし、というかそもそもクラスに女子はいないのであるがそのかわり5年間も苦楽ともにしてきた仲間がいる。

最初はとても不安であった。高専に入学できたという喜びもつかのま、クラス内に知り合いは0、授業は100分、変な先生。しかし、その心配は杞憂であった。友達はずぐにできたとし、帰り道、二人で自転車を漕ぎながら授業や先生の話をしているうちにすぐにこの学校に溶け込むことができた。定期テストは毎回大変であったが、みんなで勉強して何とか乗り越えることができた。

部活動は、弓道部を選んだ。今でも、初めて部活動見学に行った時の緊張は忘れない。高専の奥の奥の、鬱蒼とした場所にある謎の建物。足崩していいよと言われたが、社交辞令だと思いつつ頑なに正座をしていたのが懐かしい。おかげで、足が痛くてまともに見学できなかった。入部手続きをした日の帰りは、雰囲気流された気がして本当にこれでよかったのだろうかと思ったりもしたが、後日、先輩方が弓道場の陽のあたる縁側で仲良く談笑しているのを見て自分は間違っていないことを確信した。この場所では本当に色々あり、部活動の方向性について同輩や後輩と意見が衝突することもあったが、今思えば何もかもが貴重な経験であったように思える。

そんな自分ももうすぐ卒業である。あれだけ年上に見えた先輩と同じ年になって、素晴らしい後輩もたくさんできた。この5年間で得られたものはここには書ききれないほどあるし、それらを経験できる久留米高専に入ったことを誇りに思っている。クラスの、そして部活の仲間とは離れ離れになるが、全国各地で頑張っていればいつか互いの消息が耳に入ってくることもあるだろう。その時が今から楽しみである。

在校生の皆さんにも、久留米高専に入学したことを誇りに思えるように、後悔の無いように、精一杯青春を謳歌してもらいたいと思う。

最後に、この5年間でお世話になった高専の皆様方、本当にありがとうございました。

卒業～旅立つ我ら～

電気電子工学科 5年 佐々木 俊介

卒業生からの言葉といっても所詮は二十歳そこそこの若造です。過度な期待はせずにご覧ください。

クラスの皆とは5年間一緒に高専生活を送る仲間なので、一番楽しい学生であるこの時期に数多くの思い出を残すことをお勧めします。

高専生活5年間というものはあっという間に過ぎていきま

した。自分のことを言わせていただくと部活漬けの日々でした。なによりも部活を優先して考え遊びの誘いも何度も断ってしまいました。好きなことが同じ仲間と5年間もできたことは一生の思い出です。

この5年間で取得したものは電験3種くらいであり誇らしいことは言えませんが、5年間の高専生活の間で何か1つでも将来役立つ武器を持っていたほうがいいと思います。それに必ずしも形は要りません。それは経験であったり、やる気であったり何でも構わないと思います。それから好きなことを見つけて、たとえそれがどんなことであろうと一心不乱に頑張ってみてください。5年間があっという間とはいってもそれは自身の行動次第で有意義なものとなります。長期休暇の間にだらだらと過ごすのか目標を持って過ごすのでは大きく変わってきます。

高専=オタクというイメージがあると聞きますが、専門職はオタクでないとできないと思います。好きだから続けられる、好きだから我慢できるというのもあるのではないのでしょうか。

入学してきた学生の中にはただ漠然と電気関係の仕事がしたいからという理由の人もいるのではないのでしょうか。それはまったく問題ありません。専門科目の授業、実験などを経験してからでも遅いなんて事はありません。将来の夢についてはゆっくりと悩んでください。

5年間の中でお世話になったすべての方々にお礼申し上げます。



卒業にあたって

制御情報工学科 5年 松隈 俊大

5年間の高専生活が終わり、みなそれぞれの道に進もうとしています。16才で高専に入った当時は、まだ将来のことなど漠然としていました。それから5年が経ち、また人生の岐路に立っていると思うと、少し懐かしいような気持ちになります。

入学直後のなんとも言えない空気はいまだに覚えています。今では考えられないですが、確か初日はみな机に座って前を向いて昼食を食べていました。(夜須研を過ぎたころにはガヤガヤ騒いで先生方に怒られていましたが…。)日々の雑談や高専でのイベントごとは本当に楽しかったです。意見が合わないときには喧嘩もし、高専祭やクラスマッチでは真剣な話もできる良いクラスだったと思います。

卒業生の言葉

特に心に残っているのは5年生の高専祭・体育祭です。それまではクラスの参加もまばらでまとまりがなかったのですが、この年はほぼ全員が参加することとなりました。平日も授業がない時間は卒研そっちのけで殺陣の練習をし、ああでもないこうでもないという試行錯誤しながら殺陣を完成させました。ところが本番間近となって、殺陣組と応援団組で実演の方法について衝突が起きました。私自身は応援団と殺陣のかけもちだったのですが、みな真剣な表情でそれぞれの言い分を語っていました。どちらも一所懸命に練習を頑張ってきて譲れないものがあつたのです。両者の意見が食い違ったまま体育祭3日前となり、どうなることかとひやひやしていました。しかし、最終的には4年生も含めて議論した上で、みなが納得する形でなんとか本番を迎えることができました。当日は雨の中での実演となりましたが、最後までやりきることができそれぞれの表情には充実感が溢れていました。結果制御科は総合で4位となってしまいとても悔しかったのですが、後悔はありません。

高専という特殊な環境で、こんなに長い期間をともに過ごす友人というのは人生においても大事な存在です。それぞれに将来の目標があると思いますが、次にみなで集まるときには一味違った47期制御科が見てみたいです。

我が校は自由である。効果はまだわからない 生物応用化学科 5年 小川 倫明

僕の出身中学校は「個性」という言葉が好きでした。しかし日頃からの教師からの厳しい指導、生徒会の無茶な取り組みが横行するうちに、個性というよりだれにも従うプラスの個性を選抜したいだけなんじゃね?と厨二心に思っていました。そんな中学校生活を過ごすうちに進路決定の時期がきました。そのときは漠然と学区トップの公立校に入るつもりでしたが、その学校の先生と話をする講座をうけて一変しました。一人が「T 高校のいいところはなんですか」と質問し、それに対し講師は「偏差値の高さだと思う? こたえはノーだ。だっていいのは当たり前じゃん、入学するとき成績の良い人しか集めてないのだから。本校の一番の特徴はなんといっても人間性の良さなんだ。我々教職員はそれをのばす手助けをしているだけだよ。」と答えました。非常に衝撃的でした。この言葉をうけて私は「普通の高校でない、自由で、個性が強いであろう」本校に入学したのであります。

五年間を終えて、この学校は自由でいいと今一度思います。しかし最近こんなにも自由でいいのかという意見や空気が垂れ込んできています。いき過ぎた行動を抑えるのは構いません。ですが私にはどうも、真面目なヒトがそういう輩を抑えこむのに規則や法律を乱用しているようにしか見えないのです。正義という盾を前に。

皆さんには会社や研究室でいつかリーダーシップをとる時

がきます。なかには素行の悪い人もいるでしょう。その人を見放すかどうかは自由ですが、不思議なことにそういう人は人望が厚く、あなたの評判までさげてしまい、組織が動かなくなる事態も有りえます。自分は間違っていないといわれましても、現実はこちらなるから面白いんですよ。特に五年間机に突っ伏し、「あいつらはクズで勉強もしないカスだ。」と思っている成績優秀者の人、要注意ですよ。

最後に、生物応用化学科5年生へ。よい旅を。

卒業にあたって 材料工学科 5年 柳 有紀

桜の季節がすぐそこにきています。

5年間は長いようで短くて。季節の移り変わりのように様々な出来事や、数え切れないほどの出会いがありました。

高専生活では、勉強が好きになれなくてやめようと思ったこともありました。それでも厳しくも優しい先生方やクラスの友達がいたから、何とか続けることができました。5MIはいろんな人がいて、とてもおもしろくて、毎日楽しく過ごせました。高専祭やクラスマッチ、そしてテストの度にこのクラスで良かったと何度も思いました。

そして何よりサッカー部のマネージャーを続けたことが一番の思い出です。サッカー部でも、グラウンドでも、たくさん大切なひとたちに出会えました。忙しかったし、思う以上に大変でしたけど、かけがえのないものを得られたように思います。なにかに一生懸命になれたこと、あんなに熱い気持ちになれたこと、こんなにたくさんの大切な人に出会えたこと。忘れられないゴールや、最後の試合。ありがとうっていわれたこと、引退が寂しいって言ってくれたこと。幸せでした。

高専は自由な学校で、どんな学生生活を送るかは本当に自分次第です。だからこそ、後輩の皆さんには自分らしい高専生活を送ってほしいと思います。

最後になりましたが5年間私に関わってくれた方、先生方、家族、おかげで無事卒業できます！本当に感謝です。

終わりは、始まりです。それぞれの新しい道が素敵な未来につながっていますように。



修了生の言葉

専攻科修了にあたって

機械・電気システム工学専攻 2年
山田 直樹

久留米高専で過ごした7年間、小学校よりも長い期間ですが、今振り返ると本当にあっという間でした。

地元の中学校からたった1人で久留米高専に入学し、期待と不安で胸がいっぱいだった7年前、高専生活の現実を知っていく中で、「普通高校に行っていれば…」なんて考えたこともありました。それでも、勉強や部活動、様々な行事等を通して、高専に居心地の良さを感じるようになっていきました。その中で、いつしか「出世して偉くなりたい」という漠然とした夢を持つようになった私は、本科卒業後に進学という道を選択しました。

そして2年前、他大学への編入に失敗した私は、専攻科に入学しました。それもあってか、私の専攻科に対するイメージは、あまり良いものではありませんでした。しかし、この2年間を振り返ってみると、私の専攻科生活は当初のイメージを遥かに上回るものであり、毎日が本当に充実していました。特に、創造工学実験で製作した装置がパテントコンテストで入賞して特許取得に至ったことは、私の誇りであり、大きな自信になりました。また専攻科研究では、学会発表等により世の中の広さを痛感すると共に、多くのことを学びました。さらに、今後一生付き合いしていくであろう友達ができました。くだらない世間話をしたり、時には怒られたり、そんな先生達との日々も、全てが私を成長させてくれたと思います。

4月から、私は大学院に進学します。今度は第一志望の学校ですが、これを活かすも殺すも自分次第だと思います。だから、大学院でも専攻科と同等、もしくはそれ以上に充実した日々を送れるよう頑張ろうと思っています。

私が後輩に伝えたいことは1つ、それは自分がどの道に進むかを定めることは当然大事だが、それ以上に進んだ道で自分がどう頑張るかが大事だということです。

最後に、今までお世話になりました先生方や友人、家族、そして関わった全ての方々には、本当に感謝しています。ありがとうございました。今後、自分が頑張ることで少しでも恩返しができればと考えています。

8年

物質工学専攻 2年
筒井 あかり

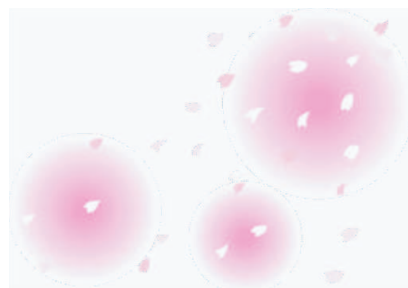
なんとなく金属に興味があって、なんとなく材料工学科に入学したのはもう8年前のことになります。在学中は英語が苦手な自分が嫌でなんとなく留学をしたり、なんとなく地元のボランティア活動に参加したりしました。そんな調子で5年生になり、またなんとなく就職しようと考えていました。しかし、いざ会社選びを始めると自分がどんな会社でどんな事がしたいのか全くわかりませんでした。その時初めて、自分がふわふわした中途半端な空間でただ流れに任せて漂っていることに気付かされました。私には特に夢と言えるほど大それた志しを持ったことはありません。ただ“楽しそうだったらやってみる”といった自由奔放な高専生活を過ごしてきたおかげで、5年生の時は多に苦しみました。

専攻科に入学して自分が将来したいことを考えながら過ごした結果、なんとなくとした枠組みが見えてきました。それは今私が学んでいる事で、お世話になってきた皆の役に立つということです。

世の中には私が知らない事が多く、自分自身がどれだけ無知という事は十重に承知しているつもりです。私が今まで学んだことで、私が社会に何ができるのかさえ正直わかりません。しかし、私は学ぶ事が好きです。世の中で求められていることを探し、それを解決することで社会貢献できる仕事が出来ればそれはどんなに幸せなことだと気が付きました。こんな単純なことに気が付くのに時間がかかり過ぎたことは否めませんが、気が付けてよかったと思います。

今まで何を学ぶかはカリキュラムが決められていて、ただひたすらに目の前の事を受動的に学んできました、これからは目的意識を持って能動的に勉学に励み、これから進む大学院での生活を通して将来のことをもっともっと具体的に考えていこうと思います。

最後になりますが、8年間という長い間お世話になった材料工学科の先生方を始め、私に関わったすべての人この場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



退職教職員からの言葉



学校を離れるにあたり
材料工学科 教授
平野 正和

6年間の短い間でしたが、この度定年を迎え学校を離れます。この間、学級担任、就職指導、それに専攻科と、多くの場面で学生の皆さんと共有することができました。皆さんの多様な個性と能力に感動させられる事が数多くありましたが、さらに骨太に育てるアドバイスとして、よく例に出される話をしたいと思います。

カエルがピーカーの中で楽しく泳いでいます。しかし変温動物である彼はピーカーが底からゆっくり加熱されているのに気が付きません。ついには水温が高くなり過ぎて死んでしまう、という話です。外の様子を見る事に気づけば良かったのに。

これほど極端ではなくとも、客観的な自分を知る事は大切です。具体的な手段は、とりあえず問題意識を持って本を読むこと、そして自分を多面的に見る練習をすることです。それから、高専風に言えば n^2 から、更には n^3 に視野が広がって行きます。求めるテーマは「卒業後の何を目標として勉強や行事に頑張っているのか」、追求の推進力は「高専を受験する時に思ったあの純粋なあこがれ」です。豊かな感性という武器を持った久留米高専生に育って欲しいと思います。

最後に、6年の間、材料工学科の先生方には一方ならぬお世話になると共に、他学科の多くの先生方にお力を貸していただきました。また、事務の方々に多々ご面倒をおかけいたしました。併せて、感謝と御礼を申し上げます。

これからの我々の技術力が日本の行方を決定します。栄えある久留米高専の発展と、卒業生の皆さんの活躍をお祈りいたします。



退職にあたって
教育研究支援室
津村 恭一

昭和59年4月、久留米高専実習係に採用され以来、時間雇用職員の勤務を含めると28年の歳月を技術職員として実習工場で過ごしてきたこととなります。

28年前、実習工場を初めて見たとき驚いたのが、ホブ盤(歯車を製作する加工機械)の数の多さと骨董品的な工作機械が工場の中核を成していることでした。実習用旋盤は昭和14年製造であり、東京市と刻印されたネームプレートが貼り付けられた工作機械等がありました。比較的新しい旋盤でも昭和36年製造(この機械は現在でも工場の主力機種)といったものです。但し、ホブ盤だけは当時としては新しいものが多かったように記憶しています。

実習係の業務は学生の実習指導、卒業研究、工学実験、先生方の実験研究のための実験装置の製作等があります。昭和59年当時は、相浦先生を筆頭に米倉先生、永野先生、桜木先生が工場の運営に携わっておられ、相浦先生の指導の下に各企業から選抜された研究員が1年間実習工場で、それぞれのテーマにそった実験、研究を行っており、また、外国の企業からの研究生も迎えていました。研究生の受け入れが6年ほど続き、その間は非常に忙しい思いもしましたが、歯車加工について多くを学ぶことが出来たと思います。

現在、実習工場は28年前と比べ大きく様変わりしつつあります。NC工作機械が多数導入され、昭和14年製の实習旋盤は3年前にすべて廃却となり新しい実習旋盤が設置されました。時代のニーズに合わせた実習、実験が求められています。しかし、一貫して、ものづくりの基礎を学ぶ実習は28年前と変わってはいません。今後もこのスタンスは変わらないと思います。

最後に久留米高専の益々の発展を祈念して筆を置きます。長い間本当にお世話になりました。

退職教職員からの言葉



退職にあたって

教育研究支援室
伊藤 良信

昭和60年4月より、久留米高専学生課実習係で勤務させていただきました。のち教育研究支援室となり27年間学生実習指導員としての機械工作実習、教官の研究実験補助として努めさせていただきました。

その間振り返ってみますと、本校(機械工作実験室)では歯車メーカ、ホブメーカから多数の研究生を受け入れ研究実験が行われていました。このような研究実験の補助として毎日の様に終業時まで歯車(ワーク)作りをしていた事が思い出されます。

又機械工作実習では、優秀な学生を社会へ送り出すために指導員として、機械加工実習の中でしっかりと基礎を学ばせ5年間の間でそれが少しずつ生かされていくような技術指導をして参りました。若い人が就職して社会人となる為には積極性、やる気をおこさせことが大事なことです。5年間で学んだ基礎技術が社会へ出てあらゆる産業界の第一線で活躍出来ることを願っております。

機械工作実習の他に、先生方の研究実験の補助として歯車製作に従事し、又全国の機械メーカ、工具メーカ、地元の企業から参加していただき互いのレベルを高める為の公開講座(歯車加工講座)や、ホブメーカより研究生を迎えての歯車に関する研究実験の補助としてお手伝いが出来た事、又ロボットコンテストでは第1回大会から参加学生の指導に関わり全国大会において準優勝、優勝の手助けが出来た事を誇りに思っております。

思えば、この27年間の教育現場において歯車に始まり、歯車に終わった様な気がします。私にとって歯車、モジュール、この言葉は一生忘れる事は出来ないでしょう。

最後に教育研究支援室(教室会)の皆さん、楽しい思い出を有難うございました。心より感謝申し上げます。

今後の久留米高専の益々の発展を願っております。

新任者紹介



萩原 義徳(はぎわら よしのり)
職名 生物応用化学科 助教
(平成24年1月1日付)
前職 ルール大学ポーフム(ドイツ)
博士研究員
抱負 教育・研究に一生懸命励みたい
と思います。どうぞよろしく
お願いいたします。
趣味 サイクリング・バイクツーリング
旅行



吉武 靖生(よしたけ やすお)
職名 教育研究支援室
(第一技術グループ)
(平成24年3月1日付)
前職 コベルコ建機株式会社
グローバルものづくり推進部
抱負 前職とは業種・職種共に異なり
ますので、1からしっかり勉強
していきます。ご迷惑をお掛け
することがあると思いますが
よろしくお願い致します。
趣味 ラケットスポーツ・映画鑑賞

専攻科インターンシップ

高専における長期インターンシップ

機械・電気システム工学専攻 2年
酒見 慶太

私は長期インターンシップとして2ヶ月半の間、株式会社ワキタハイテクスでお世話になった。業務内容は防衛産業、宇宙産業、可搬式ベルト加硫機の製造と多岐にわたる。実習の内容はミサイルの部品を格納するコンテナの組み立て補助であった。実際に行ったのは組み立て、寸法計測、シルク印刷等であった。

私が長期インターンシップを通して最も強く感じたのは「ものづくり」がいかに繊細な作業であるかということである。インターンシップが始まった当初の私は製品に塗装の剥離や小さな傷があったとしても、気がつかないような場所であればわざわざ時間と手間をかけて修正する必要はないだろうなどと考えていた。しかし、そのような考え方が「ものづくり」に携わる人間にとって不誠実であることは実習を進めていくうちにすぐに分かった。「もし自分が車を買うとして、普通に乘っていれば気がつかないような傷でも見つけてしまえばやはり嫌な気分になる。妥協せずに作られた車を買いたいはずだ。」と社員の方に言われて納得した。「ものづくり」において最も大切なことは顧客の視点に立つことであり、製品の完璧な仕上がりを目指す姿勢こそが誠実な姿勢なのだと感じさせられた。そういった姿勢を学ぶことができたので、インターンシップは私にとって大きな財産となった。

また、インターンシップの意義についても考えさせられた。「社会経験を積む」及び「自分が学んだことに対する理解を深める」ことがインターンシップの目的である。前者に関して疑いは無い。しかし後者に関しては実際のところ、もちろん全ての企業ではないが、インターンシップが行われる企業の一部には学んだことが全くと言っていいほど生かせない、つまり、単純作業を延々と行うような場所もある。給料が支払われるというわけでもない。そういった企業はインターンシップで実習に来ている学生のことを「無料のアルバイト」とでも思っているのではないかと私は考えてしまう。長期インターンシップを受け入れる企業は少ないが、目的を見失い、こういった企業をインターンシップ先としてはいけない。時期及び期間等の条件を含め見直すべきである。

顧客の視点に立った「ものづくり」を行うように、学生の視点に立った「教育づくり」を再考するときが来ているのではないだろうか。

インターンシップを終えて

物質工学専攻 2年
池田 圭

私は、昨年十月から二ヶ月間茨城県つくば市の物質・材料研究機構にてインターンシップをさせて頂きました。初めての土地、初めての一人暮らし、知人のいない環境に不安を抱きながら私は福岡を後にしました。不安いっぱい私を迎えてくれたのは、インターンシップの担当者である安田さんでした。研修では、次世代太陽電池として注目されている有機薄膜太陽電池の作成と特性評価に挑戦しました。化学を専攻している私にとって、異分野となる応用物理分野での研修でした。初めの一ヶ月は、今までに扱ったことのない装置の操作や太陽電池作成の手順を覚えることに精一杯で、アツと言う間に過ぎていきました。研修も二ヶ月目に入ると少し余裕が出てきて、どのくらいの特性が出るのかと期待を抱きながら楽しみながら研修に取り組んでいました。休日には安田さんをはじめ、多くの職員の方々と食事や観光にも行きました。公私共に充実した研修生活を送ることが出来ました。研修も終わりに近づく頃には福岡を出た時の不安も忘れて、「あと一ヶ月研修期間が長ければよかったのに」と思ったほどです。研修中に最も印象に残っていることが、安田さんがワクワクしながら楽しそうに実験に取り組んでいる姿でした。「好きこそ物の上手なれ」と言うことわざがありますが、どんな研究・仕事でも楽しいと感じることが上達への一番の近道なのだ実感しました。

高専での研究を離れ実際の研究現場に身を置くことで、限られた期間の中で結果を出すことの難しさを知り、研究・仕事を楽しむことの重要性を再確認することが出来ました。二ヶ月という短い期間ではありましたが、高専での六年間に匹敵する濃密で学ぶことの多い有意義な研修になりました。

最後になりましたが、期間中ご指導いただきました物質・材料研究機構 安田剛 主任研究員と親切に頂きました職員の皆様にご心よりお礼申し上げます。



全国高等学校パソコンコンクールに 参加して

電気電子工学科3年 北川 巧

久留米高専では体育祭が行われている最中、福島県は会津若松市の会津大学で開催された第9回全国高等学校パソコンコンクール(通称:パソコン甲子園)に参加してきました。パソコン甲子園はプログラミング部門、いちまいの絵部門、デジタルコンテンツ部門、さらに今回から新設されたモバイル部門の計4部門で全国の高校生や高専生が競い合う大会です。プログラミングラボも毎年参加して、多くの成績を残してきました。今回のパソコン甲子園にはモバイル部門に自分を含む3人、プログラミング部門に2人の計5人で参加してきました。

モバイル部門では「宇宙で役立つ」というテーマに沿った、Androidスマートフォンで動作するアプリケーションを制作してプレゼンテーションを行い、その評価を競いました。宇宙というテーマからとても難しかったのですが、「スマートフォンから無重力空間にある色々な物を自在に操作できれば面白そう」というアイデアから「色々な物に取り付ける事が出来て、動かすことのできるデバイス」とそれを操作出来るアプリケーション「モノコントローラー」を制作しました。デバイスの開発、Bluetooth通信の実装など期間的に難しかったり、経験がなかったりと色々な問題はありましたが、ハードウェアの出来や作品の独創性、プレゼンの分かりやすさが評価されて準グランプリを受賞することが出来ました。

また、与えられた問題を解くプログラムを時間内に作成するプログラミング部門に出場した2人も日頃の成果を発揮して、6位に入賞しました。

大会中や懇親会では、他のチームの人と互いの作品について意見を交換したり、日本Androidの会長である丸山不二夫さんから直接ご意見を頂いたり、とても貴重な経験が出来ました。

自分はどうなっても今回が最後の出場となるので、次回は後輩達がグランプリを取ってきてくれると思います。ちなみに福島県は喜多方ラーメンも美味しくて、とても良いところでした。



第22回全国高等専門学校 プログラミングコンテスト

制御情報工学科4年 伊瀬知 洸平

去年の12月に、京都府舞鶴市で全国高等専門学校プログラミングコンテストの本戦が開催されました。本来は10月に岩手県で開催予定だったのですが、3月の震災の影響で開催日時を遅らせて場所も変更になったという経緯があります。

高専プロコンは全国の高専生が独創的なアイデアと技術を集結してソフトウェアを開発して発表する大会で、決められたテーマに基づいてソフトウェアを制作する課題部門と、テーマは特に無く、自由な発想のもとソフトウェアを制作する自由部門、特定のルールのもと答えを導き出すプログラムを作成して、その答えを出す時間を競う競技部門の3部門があります。私は今回自由部門のメンバーとして参加しました。

去年の3月頃からプログラミングラボ部内でアイデア出し・チーム決めを行い、高専プロコンがスタートしました。6月の予選(書類審査)で競技部門と自由部門で1チームずつ本戦出場を決めました。予選通過してからは開発が本格化してとても忙しい日々が続きました。本戦直前は毎日夜遅くまで情報システム実験室で作業していました。

12月の本戦では自由・課題部門は予選通過したそれぞれ20チームが独創的なソフトウェアをアピールし、競技部門ではリアルタイムで問題を解かせて答えをだす時間を競っていました。私は自分達のソフトのデモンストレーションで忙しく、あまり他のチームの作品を見てまわることは出来ませんでした。いくつか見ただけでも非常に面白いソフトばかりでした。結果は自由部門が審査委員特別賞を受賞、競技部門は栄えある優勝を飾ることが出来ました。

高専プロコンに参加することで集団開発について学び、面白いアイデアに出会うことができたので非常にいい経験になりました。

来年度は自由・課題部門で最優秀賞受賞、競技部門で2連覇出来るよう、プロラボ部一同頑張りたいと思います。



表彰・受賞

城島瓦ロゴマーク 敷瓦デザインコンペ受賞裏話

生物応用化学科3年 三上 茉実

去年の夏、鬼瓦で有名な城島瓦のロゴマーク・デザインコンテストが行われました。私は真面目にデザインを考え作品を描きました。そして締め切りまであと10分…この時、私はこのコンテストが一人で何点でも応募してよいことに気づきました。「それだったらもう1枚子鬼のイラストでも描こうかな。タイトルは…『子鬼ちゃん』でいっか！」そして下書きもせずに絵を描き上げました。まさかこの『子鬼ちゃん』で最優秀賞を頂くことになるなんて思いもせずに…。最優秀賞のお知らせが届いた時、当然のことですが私は最初に描いた絵が賞を頂いたのだと思いそのまま勘違いして表彰式に向かいました。…すると瓦に彫られ大事そうに展示されている子鬼ちゃんの姿が！一緒にいた友人が驚く中、私は重要なことに気が付きました。タイトルを覚えていない！恥ずかしいタイトルをつけていたらどうしよう…、私がそんな不安を抱く中表彰式は開始されました。そして凜とした雰囲気の中で「それでは、発表します。最優秀賞は『子鬼ちゃん』…」、なんて気の抜けるタイトルなんだろう！周りがクスクス言っているのが聞こえてきて、私も笑うしかありませんでした…。

表彰式は後悔の連続だったのですが、久留米高専に通いだしてから初めて地域の人と触れ合え、久留米のことを知ることができたように思います。城島瓦共同組合の方や新聞記者の方など様々な人とお話することができとてもいい経験になりました。恥ずかしいことも多かったです、貴重な経験の機会をくれたこのコンテストと子鬼ちゃんに感謝しています。



福岡モーターショー2012 九州学生製作車両展に出展して

機械工学科5年 江田 洋佑・高橋 優弥

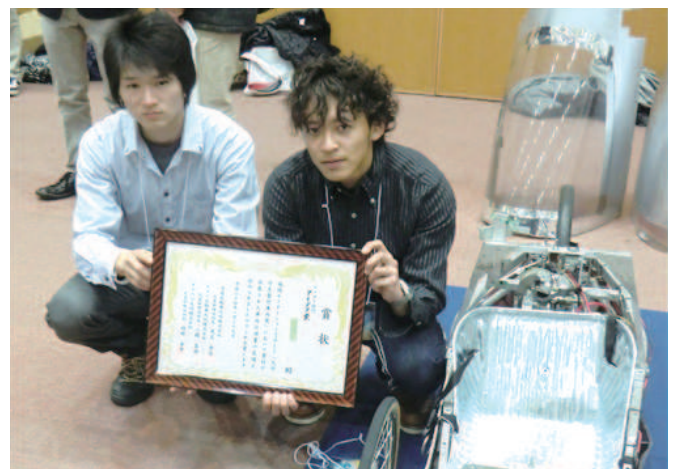
1月27日(金)から30日(月)の4日間に渡って、マリンメッセ福岡、福岡国際センター、福岡国際会議場の3会場で開催された福岡モーターショー2012のイベントの1つである北部九州自動車150万台未来展の九州学生製作車両展にエコパワー愛好会および卒業研究の共同で製作したバイオディーゼルエコランカーを出展しました。

学生製作車両展には、私達の車両を含め3台のエコランカーが出展されていました。どの車両もアイデアと技術がふんだんに盛り込まれていてとてもいい刺激を受けました。私達にはないアイデアがあったので感心するばかりでした。

私達の製作したエコランカーは、他校とは違った、エコランカーでは珍しいディーゼルエンジンを採用しています。そのため来場者からは多くの質問が寄せられました。その中には専門的な難しい質問もありましたが1つ1つ丁寧に答えていきました。出展の時はまだ燃費を計測しておらず燃費の質問には答えられなかったのですが、出展後に燃費を計測したところ1リットルで約250キロメートルを記録しました。出展前に計測できたらよかったと残念に思っています。出展して来場者の方といろいろな話ができて、とてもいい勉強になったと思います。また、小さな子供から「乗ってみたい」との声もあり、嬉しく思いました。

29日(日)には、出展車両の審査会が行われ、私達の車両はエコランカー部門にて、アイデア賞を受賞しました。

最後に本車両の製作に協力してくださった機械工学科、中武靖仁准教授をはじめとするすべてのみなさまに感謝の言葉を申し上げます。ありがとうございました。



平成24年度 学年暦
前期

4 月		5 月		6 月		7 月		8 月		9 月	
日	曜	日	曜	日	曜	日	曜	日	曜	日	曜
1	日	1	火	1	金	1	日	1	水	1	土
2	月	2	水	2	土	2	月	2	木	2	日
3	火	3	木	3	日	3	火	3	金	3	月
4	水	4	金	4	月	4	水	4	土	4	火
5	木	5	土	5	火	5	木	5	日	5	水
6	金	6	日	6	水	6	金	6	月	6	木
7	土	7	月	7	木	7	土	7	火	7	金
8	日	8	火	8	金	8	日	8	水	8	土
9	月	9	水	9	土	9	月	9	木	9	日
10	火	10	木	10	日	10	火	10	金	10	月
11	水	11	金	11	月	11	水	11	土	11	火
12	木	12	土	12	火	12	木	12	日	12	水
13	金	13	日	13	水	13	金	13	月	13	木
14	土	14	月	14	木	14	土	14	火	14	水
15	日	15	火	15	金	15	日	15	土	15	金
16	月	16	水	16	土	16	月	16	木	16	日
17	火	17	木	17	日	17	火	17	金	17	月
18	水	18	金	18	月	18	水	18	土	18	火
19	木	19	土	19	火	19	木	19	日	19	水
20	金	20	日	20	水	20	金	20	月	20	木
21	土	21	月	21	木	21	土	21	火	21	金
22	日	22	火	22	金	22	日	22	水	22	土
23	月	23	水	23	土	23	月	23	木	23	日
24	火	24	木	24	日	24	火	24	金	24	月
25	水	25	金	25	月	25	水	25	土	25	火
26	木	26	土	26	火	26	木	26	日	26	水
27	金	27	日	27	水	27	金	27	月	27	木
28	土	28	月	28	木	28	土	28	火	28	金
29	日	29	火	29	金	29	日	29	水	29	土
30	月	30	水	30	土	30	月	30	木	30	日
31	火	31	木	31	日	31	火	31	金	31	月